

瓦版ひろや

限定版

発行者 安食ひろ
連絡先 080-8237-0966

あさっての天気

中 国 …… 晴雲
出 雲 …… 風まかせ
Tokyo …… 快晴 (希望)
インド …… 日本晴

ピンク

これは潤が最近始めた作品です。釉のちよつとした厚さや、微妙な温度の加減が、とても難しいのですが、とても不思議な色です。私も永いこと陶芸をしています、この様なピンク色を見たことはありませんでした。最初はピンク？って思いましたが、生活の中で使ってみると、地味な器達の中で、そこだけがふわっと暖かい色に包まれていて、とても優しい気持ちにしてくれます。今コロナなどで、とてもふさがちな気分をちよつとなくさめて呉れるような気がします。



岡山の成羽美術館の館長が、これを見て今まで見たことのない色である、安藤忠雄が作った、コンクリートのわが美術館で作品展をしようということが決った。今回、柿傳での展示会が、そのプレオープンという感じになります。とても楽しみにしています。

林屋晴三先生

今この原稿を書いているのは、盆前の暑い日である。露地にオハグロトンボが二匹、毎年尋ねて呉れる。今年も誰の言づてなのやら、墨衣の様相である。

ここ柿傳では、しっかりと楽しく遊ばさせて貰った。きつかけは林屋先生が「ヒロさん、柿傳で個展をしないかい。茶室もあるよ」の一声であった。初めて画廊を尋ねてみると、地下深く入った画廊は別世界の様に深閑として、天井はロフトのように高く、木の床である。そしてその床がチョンナ削り風で、しかもふき漆である。九階の茶室は、表千家の残月亭の写し、贅沢な空間である。私の返答は勿論イエス・キリストである。



最初の茶会は三間を使って下座になる床には鏡を敷いて壁一面に柳の枝を画く。床が池となる。上座の二帖の畳の床には、河原の小石を敷きつめて、まるで三途の河原。床にはインドの馬糞紙に鉛筆で描いたガンジスに浮かぶ老いた小舟一つ。林屋先生、正客席に座って、安食が何をやらかすか？と興味深々。二回目の時は、正客席に当然の如くに林屋先生、鎮座。挨拶に出た私は、林屋先生にではなく、皆さんの方を向いて、皆様全員が正客です、一碗一碗濃茶を点てますと挨拶。林屋先生「うまく点てれるかい」と。

この時は三十の濃茶碗と三十の袱紗を用意する。林屋先生はいつも必ず茶会に来て下さった。「ヒロさん、こんどインドに連れて行ってくれよ」。その計画をたてて、茶会の時に渡そうと準備をしていた。しかし初めて姿を見せてもらえなかった。それから暫らくしてひよいとひとり、あちらに旅立たれてしまった。その次の

利休の一言

ありようのなきを極意とする

追憶

この老いたる婦人はインドの路上で野菜を売っている婦人である。いかなる人生を送ってきたのであろうか顔に刻まれた皺がそれをもの語る。

インドの馬糞紙に鉛筆 白チョーク
二〇二二年制作 神々しい

二回目の隠居宣言

一回目は還暦の時、そして今回、古稀を過ぎましたので二回目の隠居宣言をすることにしました。今、息子と同じ工房で制作をしていますので、頑張るのは息子にして貰い、私はもう頑張らないで、ちよつと自由に陶芸家らしからぬことをしてみようと思っています。絵を画いたり茶杓を削ったり、今は松江のさる処の茶室（立礼席）などを考えたり、まだまだ遊びたいことが沢山あります。



追憶
56cm×75cm

PINK革命 安食 潤 隠居宣言Part II 安食 ひろ 柿傳ギャラリー KAKIDEN GALLERY

- ◆会期／令和3年10月1日(金)～10月7日(木)
- ◆時間／午前11時～午後7時まで(最終日の10月7日は午後5時まで) 会期中無休
- ◆住所／〒160-0022 東京都新宿区新宿3-37-11 安与ビル地下2階
- ◆H P / <https://www.kakiden.com/gallery/>

全日在廊してお待ち致して居ります



ひろの一言

昔の老人は孫の為に山に木を植えた。今の老人は孫の為に核廃棄物を残す。これでいいの……